各種研究支援制度

先端総合学術研究科研究支援制度

・研究科紀要『Core Ethics』等の刊行
・先端総合学術研究科出版助成制度
・先端総合学術研究科調査研究プロジェクト支援助成金
・先端総合学術研究科・研究指導助手
・先端総合学術研究科・英語論文指導スタッフ
・障害学生支援
・留学生日本語サポート
・ノートパソコンの貸し出し
・プレゼンテーションに必要な機材の貸し出し

立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度

・立命館大学大学院博士課程後期課程研究奨励奨学金（給付）
・立命館大学大学院学生学会参加補助
（国内開催学会報告者補助・国外開催学会報告者補助）（給付）
・国内開催学会代表参加者旅費補助
・立命館大学大学院博士課程後期課程学生学会発表補助金（給付）
・立命館大学大学院研究生学会旅費補助（給付）
・立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費（給付）
・立命館大学大学院留学協定等にもとづく留学プログラムに対する奨学金（給付）
・立命館大学大学院海外インターンシップおよび海外教育実習派遣者に対する奨学金（給付）
・立命館大学院生を対象とするベーススキル向上のための支援（給付）
・日本学生支援機構大学院奨学金（貸与）
・立命館大学大学院貸与奨学金（貸与）
・りつめいキャンパスローン
・企業および民間助成財団等奨学金事業
・TA（ティーチング・アシスタント）
(http://www.ritsumei.jp/grinfo/grinfo04_j.html)

日本学術振興会特別研究員（合格者数）

2007 年度 DC 8 名＋PD 1 名
2008 年度 DC 5 名＋PD 1 名
2009 年度 DC 5 名＋PD 2 名
2010 年度 DC 9 名＋PD 1 名
2011 年度 DC 4 名＋PD 3 名
(http://www.jsps.go.jp/j-pd/index.html)

※先端総合学術研究科の学生が利用できる支援制度の一部です。
制度は変更される場合があり、詳細は、入学手続き時または入学時に説明します。
※立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度の概要
http://www.ritsumei.jp/grinfo/grinfo04_j.html
※受験資格や実施時期を詳細に定めた入試要項については、必ず最新のものを大学院課に請求して下さい。
大学院受験生の方への WEB ページ http://www.ritsumei.jp/gr/index_j.html からも申し込みできます。

〈問い合わせ先〉
立命館大学独立研究科事務室
tel 075-465-8348
〈入試要項請求先〉
立命館大学大学院課
tel 075-465-8195
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
ホームページ http://www.ritsumei.jp

Graduate School of Core Ethics and Frontier Science

立命館大学大学院
先端総合学術研究科

RITSUMEIKAN

出版助成・研究支援制度紹介

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/

先端総合学術研究科の院生・修了生は研究成果を書籍としてかたちにしてきました

（2007年5月刊行）　（2008年4月刊行）　（2008年7月刊行）　（2008年10月刊行）　（2009年6月刊行）　（2009年6月刊行）　（2009年8月刊行）　（2009年12月刊行）

（2009年12月刊行）　（2010年3月刊行）　（2010年4月刊行）　（2010年9月刊行）　（2011年1月刊行）　（2011年3月刊行）　（2011年3月刊行）

（単著・編著のみ。共著は除く。）

執筆者から

北村健太郎　専攻：社会学　研究テーマ「日本の血友病者の現代史」

天田城介・北村健太郎・堀田義太郎編『老いを治める――老いをめぐる政策と歴史』

私は他大学で修士号をとった後、開設年度の2003年に早期修了生（現3年次転入学）として入学しました。翌2004年度に立命館大学文学部第一号助手に採用、2005年度から日本学術振興会特別研究員DC1に採用され、2007年に博士学位論文を提出しました。2008年度から立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェローとして研究を進めています。

この研究科に入ってから、様々な研究助成制度を活用することで、研究に集中することができています。日本学術振興会特別研究員や立命館大学のポストドクトラルフェローなど、これまで様々な申請書類を書いてきたなかで、後輩にアドバイスすることができるとすれば、在学中はもっぱら自分の研究の意義をはっきりさせることに注意してきたのに対して、大学院修了後は自分が所属することになる研究室や研究室の後輩に対して自分がどんな貢献をできるのか、に注意を向けたことでしょうか。

天田城介先生、堀田義太郎さんと共に編集執筆した『老いを治める――老いをめぐる政策と歴史』はその成果の一端です。この書籍刊行に至る道筋は2007年にさかのぼります。博士論文を提出して研究生となっていた私は、一旦自分の研究テーマに区切りをつけて、自らの研究により幅を持たせたいと思っていました。そこで、血友病史研究のなかでも比較的手薄な成年や老年の抱える問題に社会保障制度の観点から接近したいと考え、グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点院生プロジェクト「老い研究会」に参加したんです。その後、2010年になって書籍刊行の話がまとまり、1年かけて研究会メンバーで論文をブラッシュアップして完成したのが今回の書籍ということになります。院生の論考はひとりひとり非常に個性的な論考となっています。老いに対する新しい視座を与える本になっていますので、みなさんに自信を持ってお勧めできます。

先端総合学術研究科院生・修了生の多くがかかわっているグローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点では雑誌『生存学』を刊行しました

（2009年3月刊行）　（2010年3月刊行）　（2011年3月刊行）

2010年度先端総合学術研究科の独自の出版助成制度から6冊が刊行されました

執筆者から

定藤邦子

『関西障害者の運動史――大阪青い芝の会を中心に』

専攻：障害学　研究テーマ：障害者の自立生活運動

私は、夫が亡くなった後、2000年に、立命館大学政策科学部に社会人編入し、政策科学研究科に進学し修了しました。私の夫は頸椎損傷の車イス使用の重度障害者だったので、夫とともに暮らした私の20年間は、夫の介護と家事の生活で、学問とは全く無縁の生活でした。学部と修士課程では、社会福祉やNPOについて学びましたが、夫の介護時代に関連して、障害者の研究をしたいと思い、先端総合学術研究科に、2004年に入学しました。

入学後すぐに、北村健太郎さんが主宰していたBody and Society研究会に入り、発表させていただいたり、皆さんにアドバイスをしていただく中で研究の方向性ややり方を導き出すことができました。先生方のご指導もきめ細かく受けることができ、的確なアドバイスをしていただきました。私の場合、研究テーマが、1970年代の関西の障害者自立生活運動だったので、先生のアドバイスは、できるだけ多くの障害者やその関係者にインタビューするようにということでした。先生方のアドバイスと研究会のおかげで、2005年度に博士予備論文（修士論文相当）を提出し、後期博士課程へと進むことができました。

それ以後は、1年に1回学会発表をし、『Core Ethics』に論文を書くことを心がけました。学会発表や論文に関しては、先生をはじめ、ポストドクトラルフェローの方々のきめ細かい指導を受けることができました。そのおかげで、学会発表では、自信をもってのぞめました。それらの積み重ねによって、2010年に博士学位論文を提出することができました。そして、2010年度には研究科の出版助成制度を受けるという幸運に恵まれ、博士論文を『関西障害者運動の現代史――大阪青い芝の会を中心に』として書籍刊行することができました。この本の中には、夫が障害者として歩いてきた時代や共に運動をしてきた障害者たちのことを書いています。本の出版は私のライフワークとしてゆっくりと取り組んでいきたいと思っていました。それがこんなに早く実現できたのも、研究科の出版助成制度のおかげであり、先端研で指導していただいた先生やポストドクトラルフェローの方々や研究会のおかげだと感謝しています。今後は、研究生として、新たな気持ちで次のステップへと研究を進めていきたいと思っています。

中倉智徳

『ガブリエル・タルド――贈与とアソシアシオンの体制へ』

専攻：社会思想史・社会学史　研究テーマ：ガブリエル・タルドの社会学

立命館大学の産業社会学部を卒業し、2003年に一期生として研究科に進学しました。2006年度には立命館大学文学部第一号助手になり、2009年度に博士学位論文を提出、2010年度にはグローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点所属の立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェローに採用されました。

2010年度の研究科の出版助成制度を活用し刊行した『ガブリエル・タルド――贈与とアソシアシオンの体制へ』は、博士論文に加筆修正したものです。博士論文を提出後すぐに出版助成制度が立ち上がり、絶妙のタイミングでした。今回の著作を刊行いただいた洛北出版の編集者には、2008年にイタリアの思想家でタルド研究者のマウリツィオ・ラッツァラート『出来事のポリティクス――知-政治と新たな協働』の翻訳（村澤真保呂との共訳）のときにもお世話になっていました。

ラッツァラートの翻訳が出たこの年の初めには、立命館大学の国際的研究活動促進研究費を利用し、フランスに短期留学することができました。この留学の際に、フランスのタルド・アーカイブで調査を行なったこと、ケンブリッジでのタルド・カンファレンスに参加できたことが現在の研究をすすめる上で本当に役に立っています。僕が研究しているガブリエル・タルドは、今でこそ翻訳が進み知られるようになってきたとはいえ、日本では研究者が多いとはいえない状況なんですが、この留学で、国際的な研究者のネットワークに触れて、研究関心のあり方を共有することができました。またこの年には、グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点の院生プロジェクトとして「労働問題・不安定生活・保証所得をめぐる国際研究」を立ち上げ、その助成を使ってラッツァラートを京都に呼び研究会を開くことができました。タルドは、従来もっぱら模倣の社会学者として日本では受容され、必ずしも社会学の古典としては認められていない状態ですが、自分としてはデュルケームやウェーバーと同様に現在読まれるべきものとして再評価したい。今回刊行した本は、そのための第一歩です。

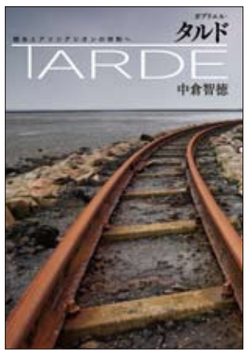
（2011年3月刊行）

（2011年3月刊行）

（2011年3月刊行）

（2011年3月刊行）

（2011年3月刊行）



（2011年3月刊行）